

# 寺本婉雅に係る 「宗林寺資料」「村岡家資料」 に対する総合的評価

三宅伸一郎 高本康子

はじめに

愛知県海東郡に生まれた寺本婉雅（1872-1940）は、1898年、真宗大学を中退しチベットに向かい、途中タルツェンド（Dar rtse mdo, 打箭炉）にて同じく真宗大谷派の能海寛（1868-1903）と合流し、1899年7月東チベットのリタン（Li thang）に至り、日本人として初めてチベットに足を踏み入れた。その後チベットの都ラサ（Lha sa）行きを目指すのが断念し1900年に帰国、同年、義和団事件に際し、陸軍通訳の任を得て再び大陸に渡り、北京より北京版チベット大蔵経を日本に将来する。1901年には、北京のチベット仏教最大の寺院である雍和宮の貫主・阿嘉呼図克図（A kyā Blo bzang bstan pa'i dbang phyug bsod nams rgya mtsho, 1870-1909）を日本に招聘する。1902年に再び大陸に渡り、1903年2月より1905年2月までチベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパ生誕の地に建てられたクンブム寺（sKu 'bum byams pa gling、塔爾寺、現在の青海省湟中県にあり）に滞在した後、ラサに入り、シッキム・インドを経由して帰国。1906年9月より1907年11月まで再びクンブム寺に滞在し、その間、ダライ・ラマ13世（Thub bstan rgya mtsho, 1876-1933）との面会を果たす。ダライ・ラマ13世の北京行に合わせて一旦帰国、1908年再び大陸に渡り、同年8月には五台山にてダライ・ラマ13世と西本願寺法主・大谷光瑞（1876-1948）の弟・大谷尊由（1886-1939）との会見を実現させる。1915年より大谷大学教授としてチベット語と仏<sup>1</sup>教学を講じた。以上のように寺本は、日本＝チベット関係史上大きな役割を果たした人物であり、また一方で、ボン教経典『ルブム・カルポ（Klu 'bum dkar po）』の翻訳（『十万白龍』、帝国出版協会、1906年）やヨンジン＝イエシェー・ギェルツェン（Yongs 'dzin Ye shes rgyal mtshan, 1713-1793）の『律史（'Dul ba'i

chos 'byung』の翻訳（『西藏喇嘛教史』『仏教研究』1（1）～（3）、1920年）をなすなどチベット学研究の祖ともいえる人物である。

大谷大学真宗総合研究所では2007年から、寺本の養子となった昌雄氏の実家である宗林寺（富山県南礪市城端）、および寺本の姪の子孫にあたる村岡家（滋賀県竜王町）より、彼に関係する資料を借用し、その研究と整理をおこなってきた。資料全体の内容把握と目録の作成という基礎的作業が終了し、個別の資料に対する詳細な研究をおこなう新たな段階に入っている。借用から8年という長い歳月が経過していることもあり、2015年度に資料を一旦返却することとなった。本稿は、宗林寺および村岡家より借用した資料に対する基礎的研究段階における総合的なりまとめであり、資料全体に対する概説および評価をおこなうものである。

本稿ではまず三宅が「宗林寺資料」「村岡家資料」（以下本稿では、村岡家より借用した資料を「村岡家資料」、宗林寺より借用した資料を「宗林寺資料」と呼ぶ）それぞれの概要と特徴を述べながら、その資料的価値について述べる。次いで高本が、村岡家より借用した資料に含まれている書簡に対する分析を通し、新たな寺本婉雅像を提示しつつ、彼に対する研究が持つ意義を述べ、その方向性を提示する。

## I 資料の概要とその特徴

### 1. 宗林寺資料

宗林寺資料全52点の内訳は次の通りである。

チベット語文献	34点
パーリ語貝葉写本	1点
直筆原稿	6点
図書目録	2点
漢籍	3点
封書	2点
蔵英辞典	1点
蔵蒙対照チベット語文法	1点
新聞記事	2点

一瞥してわかるように、宗林寺資料はチベット語文献がその大半を占める。ここでは、これらチベット語文献を中心として資料の概要と価値を述べ、宗林寺資料全体に対する評価としたい。

34点のチベット語文献うち25点が木版本であり、残り9点が写本である。木版本には、

- プトン＝リンチェン・ドゥブ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) 『プトン 仏教史 (*bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos gyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*)』 (宗林寺資料 No.1)
- ターラナータ (Tā ra nā tha, 1575-1634) 『インド仏教史 (*Dam pa'i chos rin po che 'phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar ston pa dgos 'dod kun 'byung zhes bya ba*)』 (宗林寺資料 No.25)
- クン＝ゴンポキャブ (Gung lo chen mgon po skyabs, 18c) 『中国仏教史 (*rGya nag gi yul du dam pa'i chos dar tshul gtso bor bshad pa blo gsal kun tu dga' ba'i rna rgyan ces bya ba*)』 (宗林寺資料 No.29)
- トウケン＝ロプサン・チョーキ・ニマ (1737-1802) 『一切宗義 (*Grub mtha' thams cad kyī khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long zhes bya ba*)』 (宗林寺資料 No.28)

など、今日、内容的にもよく知られ、仏教学・チベット学の分野で基本的文献とされているものが存在する。一方で、

- ツォーティトゥル 2 世ロプサン・ギェルツェン・センゲ (gTsos khri sprul sku phreng gnyis pa Blo bzang rgyal mtshan seng ge, 1757-1849) 『梵語と雪山国チベットの語を対照させアルファベット順に配列した「賢者歓喜」 (*Legs par sbyar ba'i skad dang gangs can bod kyī brda shan sbyar te kā li'i 'phreng bar bsgrigs pa mkhas pa dga' byed zhes bya ba*)』 (宗林寺資料 No. 11)
- ケンチェン・パンディタ＝イシ・パルデン (mKhan chen chen pa ṅḍi ta Ye shes dpal ldan) 『蒙古王統と仏教史 (*Hor gyi yul du rgyal rabs dang rgyal bstan bstan 'dzin yig gzog dgon sde sogs ji ltar byung tshul bshad pa rin*)』

*chen 'phreng ba zhes bya ba*』(宗林寺資料 No. 20)

など、宗林寺資料以外にその存在が確認されていない稀観書も存在する。前者は「サンスリット語・チベット語辞典」であり、類書は幾つか知られているものの、その著者の全集として知られている8巻からなる木版本の中に含まれていないものである。

後者は、1835年に著されたモンゴル仏教史であり、そのモンゴル語版は『エルデニイン・エリヘ (*Erdeni-yin Erike*)』の名前で知られ、その一写本が既に影印出版されているものの (Walther Heissig, *Erdeni-Yin Erike: Mongolische Chronik der Lamaistischen Klosterbauten der Mongolei von Isibaldan* (1835). (Monumenta linguarum Asiae maioris, Series nova, Bd. 2), Kopenhagen: Ejnar Munksgaard, 1961)、チベット語によるものは、宗林寺資料中のこれ以外に見つかっていない。

木版本としては他に、ランチャ体やヴァルドゥ体などのインド系の文字、パスパ文字などをチベット文字と対照させた文字の見本帳に類するものが3点 (宗林資料 No. 3, 4, 19) 存在する。これらの資料からは、チベットのみならずインド・モンゴルに至るアジア全体の文字文化に対する寺本の関心の高さが伺える。

9点の写本はいずれも興味深いが、その中の

- 『醫方明論中、瑠璃光佛より伝承の薬材伝承の嚴飾明註書 (*gSo ba rig pa'i bstan bcos sman bla'i dgongs rgyan rgyud bzhi'i gsal byed baidhurya sngon po las rgyud bzhi'i sman gyi 'khrungs dpe*)』(宗林寺資料 No.27)

は、チベット医学で用いられる薬材を図示した「トゥンペ (*'khrungs dpe*)」と呼ばれるものである<sup>3</sup>。類書は他にも存在するが、本資料はその第2葉裏に、明治31年 (1898) 寺本が北京に存在する最大規模のチベット仏教寺院・雍和宮にて収集したものであるとの墨書があり、来歴のはっきりとした貴重な資料である。また、

- 阿弥陀経等 (宗林寺資料 No. 26)

は、草行書に相当するウメー書体で書かれた小型の写本である。その前半はチベット語訳『阿弥陀経』である。チベット文の中には漢訳文が挿入されており、また末尾には「仏説往生浄土神呪」という真言が載せられている。こうした特徴は、寺本が「西藏文阿弥陀経和訳及其の解説」(『無盡灯』23 (7)、1918年)の中で記述する、彼のチベット語訳『阿弥陀経』和訳の原本の一つ「万暦版」の情報に一致する。それゆえ、本写本の『阿弥陀経』が原本としたのは、「万暦版」ではないかと考えられる。なお、各単語の下には、対応する訳語などがメモ書きされている。これらは本写本が、寺本のチベット語訳『阿弥陀経』和訳の際、そのノートとして用いられていたことを示す。後半に付された「*Khri kha'i yul lha'i rto mthong gsal ba'i zhugs so*」との表題を持つテキストは、青海省貴徳県の領土神 (yul lha) を本尊とした「数珠占い」のテキストであり、類書がなく貴重である。

以上のように貴重な文献を含む宗林寺資料中のチベット語文献が寺本婉雅の旧蔵書であることは、『プトン仏教史』や『醫方明論中、瑠璃光佛より伝承の薬材伝承の嚴飾明註書』に「寺本蔵書」の朱角印が捺されていることから明らかである。また、宗林寺資料 No. 31, 32, 33の写真が、寺本著『西藏語文法』(内外出版、1922年)の口絵に「著者所蔵」として紹介されていることも、このことを証明している。

これら『西藏語文法』の口絵に「著者所蔵」として紹介されているものは、宗林寺資料中のチベット語文献が寺本の旧蔵書であるということを証明するとともに、また別の事情をも示唆してくれる。宗林寺資料のうち『梵語声明経カラパの善説「明瞭な現象」(*Legs sbyar sgra mdo ka lā pa'i legs bshad rab gsal snang ba*)』(宗林寺資料 No. 33)との表題を持つ冒頭の2葉のみの不完全な写本は、表題や内容、書体から見て、大谷大学図書館所蔵チベット語文献 No. 13983の欠落している2葉に相当するものである。何らかの事情で泣き別れになったのであろう。また、宗林寺資料 No. 31 *rDul tshon bsgyur thabs sna tshogs rin chen 'od snang*, 32 *Dzam dmar chags pa rdo rje'i sgrub skor yong bcud thig le tshan pa lnga tshang ba*の2つの写本は、18世紀のゲルク派の化身ラマでニンマ派に傾倒したことによって批判を受けたレルン＝シェーペー・ドルジェ (Sle lung bZhad pa'i rdo rje, 1697-1740)の著作であるが、その書体や用紙、書式が大谷大学図書館所蔵チベット語文献中に存在するレルン＝シェー

ペー・ドルジェ全集の写本 (No. 13703-13881) と酷似し、本来この全集に含まれていたものではないかと思われる。大谷大学図書館所蔵チベット語文献の多くは、その来歴がはっきりしていない。泣き別れや酷似する写本が寺本旧蔵書中に存在するという事実は、大谷大学図書館所蔵チベット語文献のいくつかが、明らかに寺本の将来によるものであるということを示している。

寺本のチベット語文献収集経緯については、現在大谷大学博物館に所蔵されている北京版チベット大蔵経について以外、詳しくわかっていない。

彼の帰国を伝える『時事新報』7886 (明治38年10月5日) の「入蔵僧長崎着」と題する記事に、

入蔵僧寺本婉雅師は従僕一名経文二箱を携へ三日夜十時入港の獨逸郵船ジーン号にて寄港し四日朝神戸に向へり。師の談に曰く西藏の経文は既に日本に渡り居る筈なり。余が携へたるは最も珍しき部分に属す。

とあり、彼が第2回目のチベット旅行 (1902~1905) においてチベット語文献を収集し、それらを持ち帰ったことがわかる。ただ、具体的にそれらをいつどこで収集したのかについては述べられていない。

寺本と共に1899年7月東チベットに至り、日本人として初めてチベットに入った人物とされる能海寛 (1868-1901?) が、明治32年 (1899) 11月7日付でタルツェンド (Dar rtse mdo, 打箭爐) から師の南條文雄 (1849-1927) に宛てた手紙 (能海寛追憶会編『能海寛遺稿』能海寛追憶会、1917年、p. 98) の中に、タルツェンド (Dar rtse mdo, 打箭爐) で入手したチベット語文献の一覧があり、そこには

一、〔文殊師利合讚〕二百卅三葉

一、支那語〔云々〕、上卷五十四葉、下卷五十四葉

以上二部寺本君購求被致候

と寺本がタルツェンドで2冊のチベット語文献を購入したことが記されている。

また、『藏蒙旅日記』1905年12月1日の記事に (p. 293)

西藏医書ヲ崇祝寺門前書林ニ漁ス。印度ヨリノ訳書ニシテ『四根本』四卷  
価一兩八錢ナリ。

とある。管見の及ぶ限り、寺本のチベット文献収集経緯を示す具体的な記述は、  
上記以外見当たらない。

宗林寺資料のうち『プトン仏教史』は、その表紙に「明治三十九年夏／入藏  
在扎什倫布／購求之云□／寺本婉雅」との書き込みがある。また、『秘密集会  
タントラ (*rGyud thams cad kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i rtsa ba'i rgyud rgyud  
phyi ma dang bcas pa.*)』(宗林寺資料 No. 8) にも「真言秘密一切根本經書全／印  
度譯／明治四十一年夏七月／在清国甘肅省西寧府／之西南塔爾寺／寺本婉雅」  
とあり、それぞれ、いつどこで入手したものであるのかが具体的に記録されて  
いる。寺本のチベット文献収集経緯を明らかにする新たな資料であると言える。

『インド仏教史』『一切宗義』には多くの書き込みが見られ、寺本の研究の  
具体的様相を伺い知ることができる。とりわけ『インド仏教史』は(『ターラナ  
ータ印度仏教史』(西藏伝仏典註訳仏教研究〈第1輯〉)丙午出版社、1928年)の原本と  
して用いたものと思われる。

以上、宗林寺資料中のチベット語文献を取り上げ、その概要と価値を述べて  
きた。次に、他の資料についても見ておきたい。

「直筆原稿」6点(宗林寺資料 No. 36~41)のうち4点は、ポン教に関するも  
のである。うち3点はそれぞれポン教經典の一つで土地と水の精霊たちを鎮め  
る方法を述べる「ルBUM (*klu 'bum*)」のチベット語原本を筆写したものである。  
いずれも明治36年(1903)年に、寺本が活動の拠点とした東北チベット・アム  
ド地方にあるクンBUM寺で謄写したとの識語がある。行間や余白に単語の意味  
や、関連する事柄に関するメモが記されている。寺本は、「ルBUM」のうち  
「ルBUM・カルPO (*Klu 'bum dkar po*)」の和訳を1906年『十万白龍』の題名で  
発表・刊行している。その最後の和訳原稿と思われるものも、直筆原稿中には  
見られる。

ポン教は、仏教伝来以前(7、8世紀以前)の土着的信仰の要素(山の神に対  
する信仰や死者儀礼など)を受け継ぎながら、仏教の影響を受けつつ高度な教義  
体系と教団組織を形成してきた宗教で、チベット文化の基層となる宗教である  
として、近年特に注目されている。この宗教に対する文献に基づいた本格的研

究は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ラウファー（Berthold Laufer, 1874-1934）やシーフナー（Anton Schiefner, 1817-1879）、ダス（Sarat Chandra Das, 1849-1917）らによって開始されていた<sup>4</sup>。ボン教に関するこれらの直筆資料は、寺本がこうした世界的研究の動向に遅れることなく、彼らと同時期にこの宗教に対する本格的な研究に着手していたことを明らかにしてくれる。

以上のように宗林寺資料からは、

1. これまで明らかではなかった、寺本のチベット語文献収集状況の一端を知ることができる。
2. 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のいくつかは、寺本の将来によるものであることが示される。
3. チベット文化のあらゆる部分に対する寺本の学問的関心の広さが理解される。

など、寺本に関する新知見が得られる。また、資料の大半を占めるチベット語文献の中には、『蒙古王統と仏教史』（宗林寺資料 No.20）に代表される稀覯書が含まれている。それゆえ宗林寺資料は、寺本に関する研究のみならず、チベット学・モンゴル学にとっての貴重な研究資源であると言える。

## 2. 村岡家資料

村岡家資料225点の内訳は以下の通りである。

日記	3点
研究ノート	5点
論文翻訳原稿	4点
論文抜刷	6点
写真	28点
封書	90点
ハガキ	4点
寺本婉雅の履歴書	1点
ダライ・ラマからのチベット旅行許可証	



およびその和訳……………	1点
護照（パスポート）……………	2点
如来大蔵経総目録……………	1点
チベット語文献（キリスト教関係）……………	2点
満蒙蔵漢対訳経典（四十二章経）……………	1点
文書……………	73点
新聞記事切り抜き……………	1点
仏像（金剛大威徳の金銅像）……………	1点
その他……………	2点

以上のようにその内容は多岐にわたる。紙幅の都合もあり、ここではそのうち特に重要と思われる資料についての概要と価値を述べたい。

まず最も注目されるのは、日記と書簡であろう。うち書簡については、高本による論考を参考にされたい。

日記3点はそれぞれ、以下のような内題を有する。

- ①『新舊年月事記』（村岡家資料 No.1）
- ②『第二回西藏探検日誌』第一巻（村岡家資料 No.13）
- ③『第二回西藏探検日誌』第二巻（村岡家資料 No.11）

うち①『新舊年月事記』は、明治32年（1899）9月1日から明治33年（1900）9月2日までの1年間（実際の最終生地は明治33年7月27日まで）の日記であり、具体的には、東チベットのバタン（‘Ba’ thang, 巴塘）から帰国し、義和団事件に際し陸軍通訳の任を得て北京に再渡航する直前までの記録である。その日ごとに書きつけられた生の記録であり、寺本婉雅の活動を知る上で一級の価値を有する。すでに全文の翻刻を『真宗総合研究所研究紀要』（31）、2012年、pp. 143-186に発表している。その解題にも記したが、本日記からもたらされた寺本に関する新たな知見は以下の4点にまとめられる。

1. 重慶滞在中（明治32年11月29日～明治33年3月8日）寺本は、再度のチベット入りを果たすべくタルツェンドで待機する能海寛（1868-1901?）

と東本願寺との連絡役を果たしていた。

2. 喇嘛（ラマ）すなわちチベット仏教高僧の日本招聘の計画が、明治33年（1900）年当時、東本願寺ないし寺本に存在していたことが窺われる。
3. 帰国後、東本願寺はもとより、小笠原長生（1867-1958）や福島安正（1852-1919）ら軍の関係者、外務省の内田康哉（1865-1935）らと接触し、チベット再旅行に向けた準備をおこなっていた。
4. 大陸における人的ネットワークの結節点にあたる存在であった「志士」と呼ばれる民間人との接触が明治33年（1900）当時、すでに試みられていた。

残る2点の日記、すなわち『第二回西藏探検日誌』は、「西藏探検」と名付けられているが、チベットに赴く前の北京滞在中（1901年11月27日～1902年9月26日）の日記である。ただし先述の『新舊年月事記』のように、その日ごとに書きつけられた生の記録ではなく、出版等を意識して後から書き直された原稿のようである。『蔵蒙旅日記』（横地祥原編、芙蓉書房、1974年）と重複する期間の記録もあるが、本日記の方がより詳細であり資料的価値は高い。本日記については、現在翻刻作業をおこなっており、作業終了次第解題を付し、これを速やかに発表する予定である。

次に注目されるのは、5点の「研究ノート」である（⑤を除き、資料名はそれぞれ冒頭に掲げられた表題による。ただし、各資料とも内容が一貫せず、表題は冒頭の一部の内容を示すに過ぎない）。

- ①『蔵英文典』（村岡家資料 No.9）
- ②『蔵漢対訳会話篇』（村岡家資料 No.10）
- ③『仏説四十二章経』（村岡家資料 No.12）
- ④『西藏語經典翻訳集』（村岡家資料 No.14）
- ⑤ 般若心経の発音をカタカナで表記したもの（村岡家資料 No.16）

うち最も興味深いのは、②『蔵漢対訳会話篇』である。前半は、中国語・チベット語・モンゴル語の単語やフレーズを対照させたもので、チベット語につ

いては、チベット文字による表記の傍らにそれぞれの発音がカタカナ表記で添えられている。次にチベット文字書体のうち楷書に相当する「ウチェン体」と草行書に相当する「ウメー体」の対照表や「ウメー体」によるチベット語の書きつけなどが続き、後半は、中国語・モンゴル語の単語やフレーズを対照させたものとなっている。冒頭部に「明治三十四年十二月二十四日始之」とあり、「ウメー体」によるチベット語の書きつけの中に「明治三十六年」との年紀が見られることから、本資料は、1901-1903年頃にかけて作成されたものと思われる。寺本のチベット語、モンゴル語、中国語学習の様子を具体的に窺い知ることのできる資料である。

本資料にウメー体が書かれていることは注目に価する。チベット文字には大別して楷書に相当するウチェン体と、草書に相当するウメー体が存在する。管見の及ぶ限り同時代の入蔵者（チベットに赴いた日本人）が書き残した資料の中で、ここまでウメー体が用いられているものは見当たらない。現地のチベット人たちが日常、手紙やノート、公文書に用いるのは後者のウメー体である（後述する村岡家資料No.3「ダライ・ラマからのチベット旅行許可証およびその和訳」もウメー体で書かれている）。「東亜仏教の連絡」、すなわちチベット・モンゴル・日本の仏教徒の連帯を目指していた寺本は、チベット人社会により深く関わる必要があり、その為にもウメー体の習得は、彼にとって必須のことからであったのであろう。ともかく、彼が積極的にチベット文化を身につけようとしていたことがわかる。

また本資料には、鉛筆書きによるチベットの都ラサ近辺の地図が挟み込まれている。寺本が書いたものかどうか定かではないが、一級の資料である。

「ダライ・ラマからのチベット旅行許可証およびその和訳」（村岡家資料No.3）1点には、チベット語の文書であり、資料名とした①「ダライ・ラマからのチベット旅行許可証およびその和訳」の他に②「ダライ・ラマより大谷光瑩に送った手紙の下書き」、③「ダライ・ラマより福島安正男爵に送った手紙の下書き」が含まれる。そのうち最も興味深いのは①「ダライ・ラマからのチベット旅行許可証およびその和訳」である。その理由は、②および③が下書きであるのに対して、①は、ダライ・ラマ13世の捺印のある正式な文書であり、保存状態も極めて良く、チベットにおいて公文書がいかなる様式であったのかを示す類例の少ない資料だからである。

①の和訳は『蔵蒙旅日記』p. 294に、②および③の漢訳は『蔵蒙旅日記』p. 274に見られるが、そのチベット語原文はこれまで知られていなかった。チベットにおいて書簡には、受取人との身分の高低に応じ構造や語彙、形式を変えるなどの規定が存在し、その分析を通して、差出人が受取人との関係をどのように捉えていたかを理解することができる<sup>5</sup>とされている。とりわけ歴代グライ・ラマが清朝皇帝やモンゴルの王公に宛てた書簡は、チベットの対外意識を知る上で重要な資料とされ、近年注目されている<sup>5</sup>。グライ・ラマ13世が日本人に宛てた手紙は少ない。そのような状況の中で、新出の本資料は日本・チベット外交史を研究する上で新たな知見をもたらすのではないかと期待される。

「如来大蔵経総目録」(村岡家資料No. 2) 1点は、北京版チベット大蔵経カンギュル(経部)に付属する目録を参考にしながら、そこに収録されている経典名についてチベット語と漢語を対照させたものである。奥書の記述から明治33年(1900)夏、義和団事件に従軍の際、北京にあるチベット仏教寺院・雍和宮で作成されたものであることがわかる。寺本の研究の中心のひとつは、自身が日本にもたらした北京版チベット大蔵経の目録作成であった。本資料はその最初期の研究成果である。

「写真」(村岡家資料No. 27) 27点は、寺本の親族および知人の記念写真と推定されるものが多い。そのうち寺本と直接関わりがあると断定することができるのは、

- 裏面に「第二回西藏探見の前日来遊の際紀念として贈らる 明治34年11月23日 寺本婉雅」の書き込みがある和装女性の写真
- 裏面に「寺本先生閣前 羅卜蔵全丹敬送 宣統元年正月吉日」の書き込みがある洋装男性の写真
- 「大河内懐道 寺本恵実の父 明治十八年頃写」の書き込みがある黒衣を着た男性の写真

の3点であろう。

「論文抜刷」(村岡家資料No. 19) 6点には修正やメモ書きが多く見られ、論文発表後も自身の研究成果を見直そうとする寺本の姿勢が見て取れる。

「文書」(村岡家資料No. 25, 28, 29) 73点には、東本願寺から与えられた補

任状や陸軍省からから発せられた任命書、大谷大学から発せられた講師嘱託状など寺本の来歴を明らかにする資料のみならず、父・恵実に対する補任状や、山面村の土地台帳と思われるものも含まれる。寺本婉雅の来歴のみならず、明治初頭の山面村の歴史を窺い知ることのできる資料である。

以上述べてきたように、村岡家資料は、寺本の来歴や活動内容をより明らかにするとともに、彼に対する再評価を迫る、極めて重要な資料群である。

### 3. まとめ

寺本婉雅については、これまで、『蔵蒙旅日記』以外にまとまった記録がなく十分な研究がなされていないにもかかわらず、「抜け目がなかった」「運のいい人」「軍部も利用し外務省も利用」という言葉に表れているような、低い評価がなされてきた。「宗林寺資料」「村岡家資料」はともに、こうした従来の評価を覆す新たな資料である。これらの資料によって明らかとなるのは、「抜け目がなかった」「運のいい人」というものではなく、むしろ、アジア全体に対する広い視野を持ちながら、チベット文化のあらゆる面に学問的関心を寄せる姿であり、目的を達成するために黙々と働く姿ではないだろうか。

## II 村岡家所蔵書簡類について

### 1. 寺本婉雅資料が持つ可能性

寺本婉雅関連資料については、彼が大陸から持ち帰った、いわゆる「将来品」と呼ばれるもの、すなわち大谷大学その他の関係機関に寄託したチベット大蔵経等を除いては、ほとんど知られることがなく現在に至る。このように、将来品に注目が集まる一方で、遺品等の個人資料に関しては、所在調査すら十分に行われているとは言い難い状況が存在することは、「入蔵者」と呼称される何人かの日本人、すなわち、第二次世界大戦終戦以前のチベットにおける滞在経験を持つ日本人たちに共通するものである<sup>6</sup>。これは、彼等を学術的関心の対象とする場面のその多くが、「チベット研究」と呼ばれる領域に属するものであったことに理由があると、筆者は考える。「入蔵者」らの履歴についても、チベット滞在およびその前後に関心が限定されていたと言わざるを得ないのは、やはりこのような状況によるものと思われる。

しかし、「入蔵者」らの生きた19世紀末から20世紀半ばまでは言うまでもな

く、近代日本が「大陸」との関係において劇的な体験を連続して持った時期にあたる。「入蔵者」らのチベット経験は、日本が満洲やモンゴル、中国、インド等で展開していく諸活動において繰り返し召喚され、彼等は「大陸」のオーソリティー、特に「喇嘛教」に関するオーソリティーの一人として、「大陸」と日本とのコンタクトの、最前線に立つこととなった。しかしこの点が学的関心の対象となることは非常にまれであり、日本と大陸各地の交渉史においても、言及は僅少であったと言わざるをえない。

寺本婉雅はこれら「入蔵者」の一人であり、そしてその中でも、注目のされ方に非常に限定的な状況があったといわざるを得ない何人かのうちの一人である。彼について関心が持たれてきたのは、チベット大蔵経の将来および、ダライ・ラマ13世と浄土真宗本願寺派宗主大谷光瑞との連絡を仲介したその経緯の2点であるが、しかしそれは彼の「大陸」滞在10年のうち、ごく一部にすぎないとは言うまでもない。この2点を除いた彼の「大陸」経験、そして帰国以後の「大陸」との関わりへの注目は、従来全くなされていなかったと言っても、言い過ぎとはならないと思われる。

寺本の「大陸」経験において、筆者が特に注目するのは、彼が日本・中国・チベット・モンゴル等、「大陸」各地で持った人脈が、際だった広さと質を具える点である。彼は華族や富裕層の出身でもなく、また真宗大谷派においても有力な寺院の出身ではなかった。従って「大陸」においても、彼が背景とするものは当然、一介の僧侶が持ちうるもの以上ではなかった。つまり、彼の身辺を取り巻いていたのは、言ってみれば平凡な、普通の人々であった。少なくとも最初はそうであったと考えられる。しかし、寺本の人脈は、そのような人々から、例えば中国側としては、醇親王や西太后、チベット側では阿嘉呼図克図やダライ・ラマ13世、そして日本側では軍人の福島安正や松井石根、小笠原長生、外交官の内田康哉など、権力中枢に近い人々に及んでいる。そして彼を中心とするこの人的ネットワークは、「大陸」における日本人の活動の展開に、活用されていくのである。

従って2006年から大谷大学によって開始された、寺本婉雅の個人資料に関する調査は、東アジア近代史において新たな事実を提示する資料を掘り起こす、今後の学術研究への貢献の可能性に富むものであると言える。本稿ではその中から、上述の「人脈」のありようを如実に示すものとして、書簡類を取り上げ

る。

## 2. 村岡家所蔵書簡類概要

上述した寺本婉雅の個人資料は、その所有される場所によって二種に分けられる。すなわち、一つが「宗林寺資料」であり、チベット語文献を中心とするものである。もう一つが「村岡家資料」であり、これには、草稿や写真、書簡といった彼の身の回りの品々で構成される。個人資料としては更に、寺本家に保存されていた遺品があり<sup>9</sup>、これについては後述する。

本稿が取り上げようとする書簡類は、村岡家資料に含まれるものである。書簡類として整理される資料の点数は全123点であり、その体裁としては、便箋に書かれたもの、巻紙に書かれたものがあり、封筒に納められているものとそうではないもの、筆書きのものとペン書きのものがある。また、新聞記事の切り抜き等が同封されたものがある。

これらの書簡類が属する時代は、寺本の生涯のうち、成人以後最晩年までの、ほぼ全期間にわたると言える。すなわち、最も古いものは、1897（明治30）年、寺本が真宗大学第二部に在学中で、「大陸」に初めて渡る前年のものであり、最も新しいものは、1938（昭和13）年、没する前年のものである。最も点数が多いのは、大谷大学教授、および京都帝国大学講師に任命された1915（大正4）年であり、13件にのぼる。1901（明治34）年の10件がこれに次ぐ。この年は、北京雍和宮の阿嘉呼図克図の来日が実現し、彼自身チベットを目指して三度海を渡った年でもあった。更に、この前年、チベット域内到達に成功して帰国、つづけて義和団事件に派遣される第五師団の通訳に任命されて再び大陸へ渡り、北京で大蔵経の入手に成功した1900（明治33）年の9件が続く。更に帰国後1914（大正3）年の7件、1910（明治43）年、1919（大正8）年、1938（昭和13）年の6件がある<sup>10</sup>。

宛先となっているのは、118通が寺本婉雅宛、残り5通がその他に宛てたものである。発信者としては、まず組織もしくは組織代表者発のものとして、①東本願寺関係機関、②その他一般機関、個人発のものとして③東本願寺関係者、④京都帝国大学、東京帝国大学、早稲田大学などアカデミズム関係者、⑤軍関係者、⑥郷里（愛知県）関係者、⑦親族の7種に分けられる。①としては、本山教学部、本山布教局、本願寺寺務所、②としては、京都帝国大学、清国駐屯

軍管理部、大蔵省、京都帝室博物館、鏡山村村長、京都府知事、③としては石川舜台、谷了然、松枝賢哲、下間頼信、大草恵実、大河内秀雄、阿部恵水、安藤嶺丸、北方蒙、大谷瑩誠、④としては南條文雄、大森房吉、狩野直喜、松本文三郎、三浦周行、今西龍、市島謙吉、上田瑠璃子、内田銀蔵、⑤としては松井石根、井上正永、⑥としては金森吉次郎、⑦としては寺本恵実および本人が挙げられる。その他、文字が読み取れないもの、また、身元の詳細が不明な発信者が11人ある。発信者としては、南條文雄が最も多く14通であり、寺本恵実発8通がそれに次ぐ。

### 3. 同書簡類が持つ資料的特徴

村岡家所蔵書簡類に注目される場所としては、2点挙げられる。第一は、時期的な意味においてである。村岡家の書簡類は、寺本が帰国して以降没するまでの時期に属するものである。同時期の資料としては、寺本家に残された日記類があるが、大陸で書かれたものがその大部分で、1909（明治42）年の帰国以降に書かれたものは、1921（大正10）年および1935-40（昭和10-15）年の2冊のみである。従って村岡家の書簡類は、日記が発見されていない時期の寺本を考える時、最も詳細な情報を提供しうる資料であると言える。

第二は、資料的な意味においてである。上に述べたように、寺本の持った「人脈」に注目する際、書簡類はその実際のありようを直接かつ詳細に示すことの可能な資料であると言える。現在まで寺本に関して参照される記述は、彼の弟子横地祥原が編集した『蔵蒙旅日記』（芙蓉書房、1974年）であり、そしてこれが最大かつ唯一のものというに近い状況にあった。村岡家の書簡類は、この『蔵蒙旅日記』に見られる情報を更に詳細に、そして同書に見られなかったものを新たに提示しうるものであると言える。前者としては、大谷大学や京都帝国大学を中心とするアカデミズムや、福島安正や小笠原長生その他を例とする軍との繋がりがあり、後者としては、例えば故郷愛知県との繋がりが挙げられる。

本論が注目しようとする、帰国以降没するまでの時期の寺本の活動が、現在までに未知のままに残されてきた、その最大の原因とも言えるのは、寺本について時に、軍との繋がりが、政治家との繋がりとが強調されがちであったことであると思われる。<sup>12</sup>これは大陸滞在時、西太后など清朝皇室に近く活動したこと、



グライ・ラマ13世と大谷光瑞の代理大谷尊由との会談を取り持ったことなどが、いわば限定的に取り上げられ、注目されてきたからであると考えられる。

しかし、新出の寺本婉雅<sup>13</sup>関連資料によっては、これとは異なる寺本像が示されることになった。それは、特に村岡家、寺本家資料が、日記や書簡、手稿など彼の身边に最も近く存在した品々であり、それゆえに彼の、いわば私的な部分に関する情報、すなわち、今まで全く関心を持たれてこなかった情報を多く含むものであったからであると言える。例えば村岡家書簡は、軍関係や仏教関係といったものに限られない、様々な立場の人物からの書簡が含まれるがゆえに、寺本の人脈を立体的に再構成するに最も有力な資料群の一つであることは、すでに述べた通りである。そしてそのような再構成こそ、寺本の事績を検討・評価するにあたって第一に優先されるべき作業であると、筆者は考える。なぜなら、寺本の生きた時代は、日本が大陸においてその行動を、軍事的なものを含め、先鋭化させていく時期でもあったからである。このような時期に大陸に主体的に関わった日本人、しかも宗教者でありアカデミズムの一員であった人物を考えることには、慎重かつきめ細かな態度が要求される。しかしそれゆえに、今後の東アジアと日本の関係を考えるにあたって、新たな契機を見いだすのが、寺本婉雅の事績であるとも言えるのである。

#### ※ 謝辞

長年大切に保管された貴重な資料の借用を長年に渡ってお許しくださり、その研究の機会を与えてくださった宗林寺および村岡家に感謝の意を表したい。

#### 注

- 1 以上、寺本婉雅の事績は、主に横地祥原（編）『葦蒙旅日記』（芙蓉書房、1975年）に付されている寺本婉雅略年譜に依った。
- 2 これら資料の発見経緯については、三宅伸一郎「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について」（『大谷学報』87（2）、2008年、pp. 41-44）に記した。
- 3 本資料についてはすでに、石濱裕美子・西脇正人・福田洋一・谷口伸治『チベット伝統医学の薬材研究』（藝華書院、2015年）にその全影印が公開されている。。
- 4 Berthold Lanfer, *Klybum bsdus pai sñin po: eine verkürzte Version des Werkes von den Hunderttausend Nāga's: Einleitung, Text, Übersetzung und Glossar.*

- (Suomalais-ugrilaisen Seuran toimituksia, 11), Société Finno-Ougrienne, 1898. Anton Schiefner, *Über das Bonpo-Sūtra: "das weisse Nāga-Hunderttausend"*. (Mémoires de l' Académie impériale des sciences de St.-Petersbourg, 7 ser., tob. 28, no. 1), l'Academie Imperiale, 1880. Sarat Chandra Das, "Contribution on the Religion, History, etc. of Tibet: I. The Bon (Pon) Religion", *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, vol. 50, no. 3, 1881, pp. 187-205.
- 5 石濱裕美子「チベット文書簡の構造から見た17世紀のチベット、モンゴル、清関係の一断面：ダライラマ五世、摂政サンゲギャムツォ、ガルダンの書簡を用いて」『アジア・アフリカ言語文化研究』55、1998年、pp. 165-189参照。
- 6 入蔵者として典型的に言及されるのは、以下の10人である。1899（明治32）年、日本人として初めてチベット領域に達したとされる寺本婉雅と能海寛、日本人最初のチベット旅行記執筆者である河口慧海、情報収集のために外務省に派遣されチベットに潜入した成田安輝、ダライ・ラマ13世と西本願寺門主大谷光瑞の間の交換留学生としてラサに滞在した青木文教と多田等観、チベット軍の育成にかかわり、チベット人を夫人として日本に連れ帰った矢島保治郎、第二次世界大戦中、陸軍特務機関および外務省によってチベットに派遣された野元甚蔵、西川一三、木村肥佐生である。
- 7 寺本の大陸での活動に関する主な先行研究としては以下がある。山口瑞鳳「入蔵した日本人」（『チベット』上巻、東京大学出版会、1987年、pp. 61-91、特に pp. 65-67、pp. 81-91）、金子民雄「解説」（『寺本婉雅著作選集』第4巻、うしお書店、2005年、pp. 1-18）、前掲白須浄真「1908（明治41）年の清国五台山における一会談とその波紋—外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊—」、前掲篠原昌人「明治時代の対チベット接近策—福島安正、寺本婉雅を中心に—」、奥山直司「河口慧海日記・蔵蒙旅日記」（武内房司編『日記に読む近代日本』5、吉川弘文館、2012年、pp. 134-161、特に pp. 152-161）。以上が、主に『蔵蒙旅日記』を主資料とし、それに外交史料等を併用してなされた考察であったとすれば、新出の大谷大学所管資料の整理分析成果としては、三宅伸一郎「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について」（『大谷学報』第87巻第2号、2008年、pp. 41-44）、高本康子「大陸における対「喇嘛教」活動—寺本婉雅を中心に—」（『論集』第39号、2012年、pp.93-106）、同「寺本婉雅の大陸人脈—大谷大学所管資料を中心に—」（『印度学仏教学研究』第63巻、2014年、pp. 528-532）がある。

- 8 大谷大学による諸調査については、三宅伸一郎「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について」(『大谷学報』87(2)、2008年、pp. 41-44)、高本康子・三宅伸一郎「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」(『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』(31)、2014年、pp. 143-186) に詳しい。
- 9 寺本家資料の整理分析は未だ完了していないが、現在までの調査結果については、高本康子「寺本婉雅関連資料の現在―寺本家資料を中心に―」(『論集』(41)、2014年、pp. 21-35) に述べた。
- 10 これに加え、年月日が不明であるものが19件ある。これには、書簡に付せられているものが、月日、もしくは日のみであって、消印が読み取れないもの等がある。
- 11 5通の内訳は、寺本恵実宛2通、本願寺事務所宛1通、松枝賢哲宛1通、村上迂生宛1通である。
- 12 例えば、ジャーナリストや作家、エッセイストなど、チベットに関心を持つ人々が広く集まって、日本とチベットについて語る場をもった際の記録として、『チベットと日本の百年』(新宿書房、2003年)がある。この中の表現を引用し、三宅伸一郎が以下のように指摘している。「寺本婉雅の対するこれまでのイメージは、たとえば、「抜け目がなかった」「運のいい人」「軍部も利用し外務省も利用」という言葉に表れているように、あまりよいものではなく(中略)高く評価される能海寛にくらべ、一段と低い評価が下されている」(前掲高本康子、三宅伸一郎「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」、p. 152)。三宅が言うように、寺本像は、能海寛や河口慧海と対比されることで、能海や河口が持ったチベット仏教に対する情熱や志の、あたかもその代替物のように、寺本においてチベットの政治問題にかかわったことがクローズアップされてきたと言える。
- 13 これについては高本康子「海闊天空―五台山以後の寺本婉雅―」(荒川正晴、柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅』勉誠出版、2016年)に詳述した。